

# 社会的養護におけるメンタルケアに関するアンケート 調査結果

2020年10月16日

## **施設・里親家庭で暮らす子ども・暮らしていた若者への心のケアの拡充を求めるプロジェクト**

は、虐待から保護され、施設や里親家庭等で生活された経験のある方々が、ご本人の負担を可能な限り軽減した上で精神的ケアを受けることができる社会の実現を目指しています。

私たちはまず、施設や里親家庭等で生活された経験のある方々がこれまでに受けてきた精神的ケアの現状・課題や当事者の主観的ニーズを明らかにする必要があると考え、全国の施設や里親家庭等で生活されている方、または生活された経験のある方を対象に、アンケート調査を実施いたしました。

### 1. 目的

全国の児童養護施設または里親家庭・ファミリーホームで生活している方、または生活した経験のある方がこれまでに受けた精神的ケアの現状・課題や当事者の主観的ニーズを把握するため。

### 2. 調査概要

#### (1)調査対象

児童養護施設または里親家庭・ファミリーホームで生活している方、または生活した経験のある方

#### (2)調査方法

調査対象者（児童養護施設または里親家庭・ファミリーホームで生活している方、または生活した経験のある方）に向けて、SNS上で回答を呼びかけました。調査はウェブサイト（スマートフォン対応）で回答を受け付けました。対象者へ連絡可能な場合は、WebサイトのURLを伝え、回答を依頼しました。

#### (3)実施時期

調査は、2020年7月22日から2020年8月31日まで実施しました。

#### (4)回答数

回答数は121でした。そのうち、重複回答等を除く有効回答数は116でした。

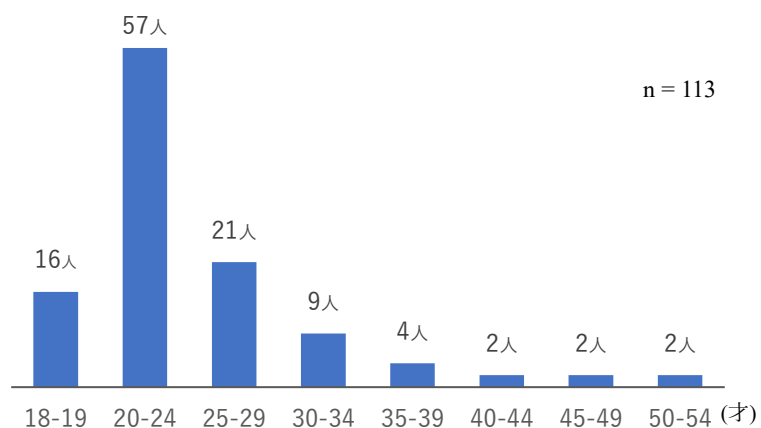
### 3. 調査結果

#### (1)回答者の年齢（回答時）

回答者の回答時の年齢で最も多かったのは「20歳～24歳」で、57人(50.4%)でした。

「25歳～29歳」が21人(18.6%)、「18歳～19歳」が16人(14.2%)と続き、29歳までの回答者が全体の8割以上を占めました。回答者の最高年齢は53歳でした。回答者の平均年齢は25.7歳でした。

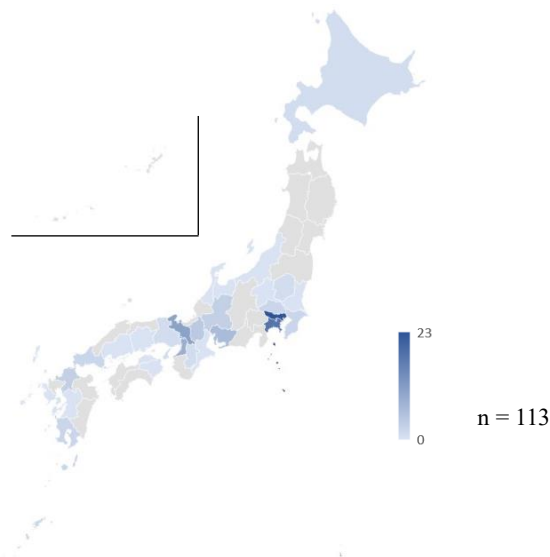
図表1 回答時年齢



#### (2)生活していた施設、里親家庭等の所在地

最多は東京都の23人(19.8%)でした。次いで神奈川県18人(15.5%)、京都府11人(9.5%)となり、上位3都府県で全体の4割を超えました(44.8%)。回答者が生活していた施設・里親家庭等は28都道府県に及びました。

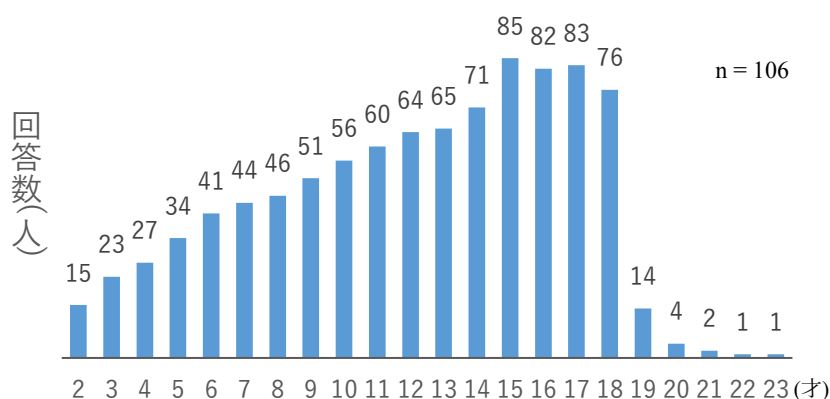
図表2 生活していた施設・里親家庭等の所在地



### (3)施設・里親家庭等に在籍していた年数、在籍時の年齢

回答者の平均在籍年数は、およそ 8.5 年でした<sup>1</sup>。また回答者が在籍していた年齢は 15 歳が 85 人(73.2%)と最も多く、17 歳が 83 人(71.5%)、16 歳が 82 人(70.6%)と続きました。回答者は、比較的高年齢のときに施設や里親家庭等で生活していた傾向があることがわかりました。

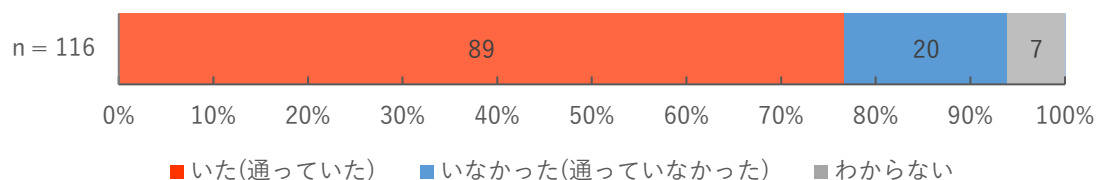
図表 3 施設・里親家庭等に在籍していた時の年齢



### (4)心理士・カウンセラーへのアクセスの可否

施設や里親家庭等に心理士やカウンセラーがいた、または児童相談所心理職等の関係機関のカウンセラーのもとへ通っていたと回答した方は 89 名(76.7%)で、回答者の 4 人に 3 人は、心理士やカウンセラーとの関わりを持つことのできる環境であったことがわかりました。「いなかった」と回答された方は 20 名(17.2%)、「わからない」と回答された方は 7 名(6.0%)でした。回答者のうち 2 割以上は、心理士やカウンセラーとの関わりを持つことができない状況であったことがわかりました。

図表 4 心理士・カウンセラーへのアクセス可否

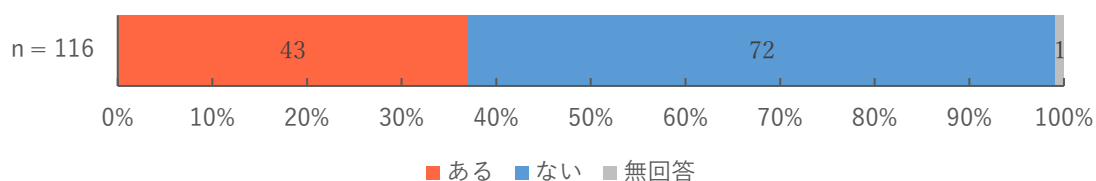


<sup>1</sup> 回答しやすさを考慮して年単位の回答としたため、誤差の大きい設問です。例えば「7 歳から 15 歳」という回答は、「7 歳 0 か月～15 歳 11 か月(8 年 11 か月間)」から、「7 歳 11 か月～15 歳 0 か月(7 年 1 か月間)」まで、施設や里親家庭等で生活されていた実際の期間に幅がある可能性があります。

### (5)精神的ケアを受けた経験の有無

施設や里親家庭等でトラウマ治療やカウンセリングなどの精神的ケアを受けた経験が「ある」と回答した方は43名(37.1%)でした。

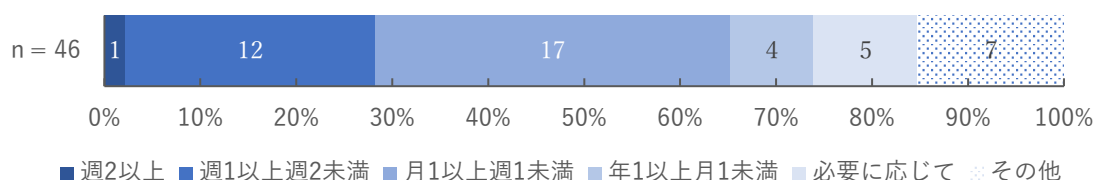
図表5 精神的ケアを受けた経験の有無



### (6) (5)で「ある」と回答した方) 精神的ケアの頻度

施設や里親家庭等でトラウマ治療やカウンセリングなどの精神的ケアを受けた経験が「ある」と回答された方にその頻度を尋ねたところ、「月1回」と回答された方が11名(24.4%)で最も多く、次いで「週1回」と回答された方が10名(22.2%)でした。適切なタイミングで精神的ケアを受けられた方もいれば、そうでない方もいらっしゃいました。

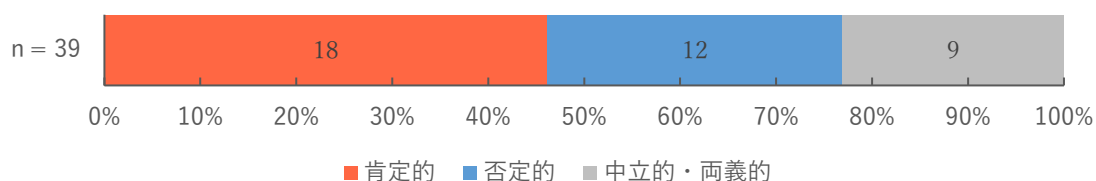
図表6 精神的ケアの頻度



### (7) (5)で「ある」と回答した方) 精神的ケアへの評価

施設や里親家庭等でトラウマ治療やカウンセリングなどの精神的ケアを受けた経験が「ある」と回答された方にその評価を尋ねたところ、肯定的な評価が18人(46.2%)、否定的な評価が12人(30.1%)、中立的・両義的な評価が9人(23.1%)でした。

図表7 精神的ケアに対する評価



施設や里親家庭等で受けた精神的ケアに対する評価（自由記述より一部抜粋）

肯定的な評価

- ・カウンセラーの方が優しくしてくれたり、フラッシュバックが起きそうになった時には1度中断したり、「大丈夫？」などと声をかけてくださったのですごく良かった。
- ・当時の気持ちを話して、肯定してもらえたのは良い経験。
- ・落ち着き方を教えてもらった。
- ・良かったと思います。心が穏やかになりました。
- ・多様な考え方ができるようになった。少しだけ気が楽になった。
- ・最初は人と話すのも嫌でしたが、受けられてよかったと思います。

否定的な評価

- ・「それは辛かったね」の賛同だけは辛かった。ただの同情のように思えた。
- ・児童養護施設のカウンセリングは、先生が合わなかったのか、逆にストレスだったし、強制だったからきつかった。やめさせてもらえなかった。
- ・そもそも信頼が築かれてない中でのカウンセリングだったので、不快にしか感じていなかった。
- ・カウンセリングはあったけど、虐待の事実は児相にも施設にも言えてなかった。

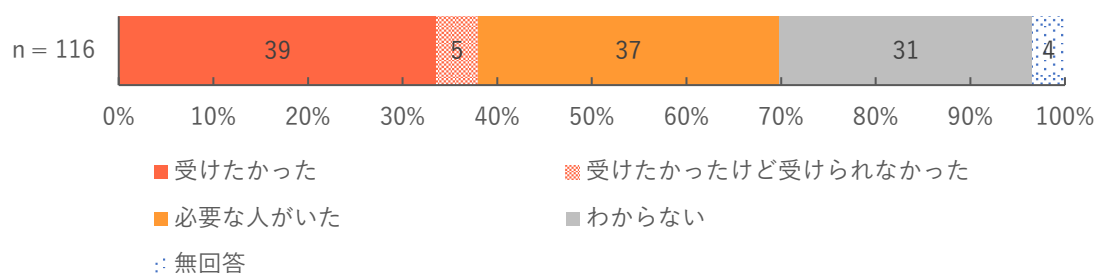
中立的・両義的な評価

- ・カウンセリングの守秘義務のおかげで素直に自分の気持ちを言えたが、逆に言うと施設の職員と連携がとれなかったのが、本当の気持ちに職員が気づいてくれなかった。
- ・治療途中なので苦しいし分からないが、恐ろしさを言葉にする場にはできた。幼少時に治療して貰えれば、負担が軽減されたのではなかったか。
- ・日々の生活に追われ過去を見つめる機会が与えられない中、たった1人向き合ってくれた職員には感謝している。今考えれば、本当に一緒になんとかしようと思いを砕いてくださったと思う。しかし、施設に対してはもっと定期的・継続的にケアしてほしいと思う。

#### (8)施設や里親家庭等での精神的ケアに対するニーズ

施設や里親家庭等でのトラウマ治療やカウンセリングなどの精神的ケアに対するニーズを尋ねたところ、「受けたかった」と回答された方は39名(33.6%)で最も多く、次いで「自分には必要なかったが必要な人もいたと思う」と回答された方は37名(31.9%)でした。

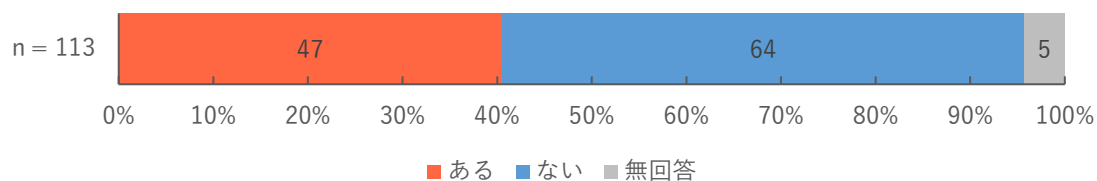
図表8 施設や里親家庭での精神的ケアに対するニーズ



#### (9)精神的ケアを受ける検討の有無（施設・里親家庭等を離れた後）

施設・里親家庭等を離れた後、トラウマ治療やカウンセリングなどの精神的ケアを受ける検討の有無を尋ねたところ、「ある」と回答した方は47名(40.5%)でした。回答者全体のおよそ4割の方が、虐待のケアを検討したことがあることがわかりました。

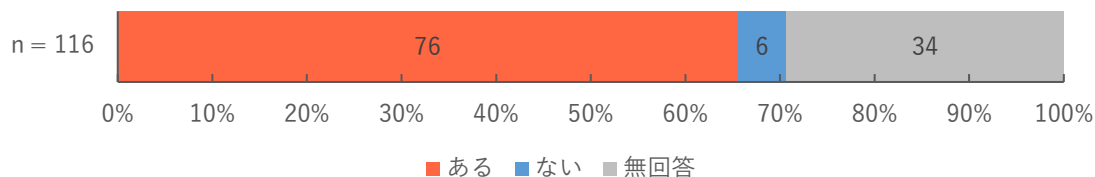
図表9 精神的なケアを受ける検討の有無（施設・里親家庭等を離れた後）



(10)現在、虐待の後遺症として生きづらさを感じていること

現在、虐待の後遺症として生きづらさを感じていると回答された方は76名(65.5%)で、回答者全体の6割以上の方が、虐待を原因とする生きづらさを感じていることがわかりました。自由記述の回答を、五つの種類に分けて整理しました。

図表 10 現在の虐待による後遺症の有無



現在自覚されている虐待による後遺症（自由記述より一部抜粋）

- ・暴言、暴力に反応してフラッシュバックが起ること。
- ・夕方時などの家族連れが多く街に出歩く時間に外を歩くと、その光景に涙が止まらなくなる事がある。このように、時折自分の意に反して、過去の感情が急激に流れ込んできて、自分を支配してしまう感覚に襲われる。
- ・特に夜寝る時にフラッシュバックしてしまい寝られない。
- ・大きい声とか怒鳴り声聞いたらシャットアウトをして、人の話を聞けなくなる。
- ・自分に危害を与えられないかと、人の顔色を伺ってしまう。
- ・ハンガーやベルトで叩かれた経験があるため、見る度に虐待を受けていた頃が思い出される。
- ・唐突に生きる気力が無くなる
- ・仕事が続かず辞めては職についての繰り返しで将来の不安が大きい
- ・大小関係なく、解決できないことがあると、すぐに死にたいと思ってしまう。
- ・感情のコントロールが難しい
- ・記憶障害
- ・周囲に話せず、親のをごまかして言ったり嘘をついて言ったりしてしまうので罪悪感が生まれる。周囲の温かい家庭の話を聞くと悲しくなる、みじめな気持ちになる。
- ・子育てでの不安、愛情を求めすぎて交友関係や人との距離感がおかしい。
- ・実際の親がいないのにふとした時に幻聴で名前を呼ばれるということが起こる。

#### 4. 結果のまとめ

今回のアンケート調査では、大変ありがたいことに、施設や里親家庭等で生活された経験のある方や現在施設や里親家庭等で生活されている 116 名もの方々から回答を寄せていただきました。

今回の調査では、施設や里親家庭等で受けてきた精神的ケアに対する経験者の率直な評価を得ることができました。回答者の 8 割近くが心理士・カウンセラーへのアクセスが可能であり、自身が受けた精神的ケアに対しては、肯定的な評価が 46.2%、否定的な評価が 30.1%でした。精神的ケアによって落ち着きや安らぎを感じ、過去の被害経験の受け止め、自己イメージや他者への信頼感の回復等の効果を感じた方がいらっしゃいました。一方で、精神的ケアを一律に提供すれば直ちに当事者のニーズが充足されるわけではなく、ケア提供者との信頼関係、タイミングや頻度、主体的な選択の機会が保障されることが重要であることもわかりました。

また、施設や里親家庭等を離れたあとに直面している困難についても明らかになりました。施設や里親家庭等を離れたあとも、虐待の後遺症によって生きづらさを感じている回答者が全体の 6 割以上でした。回答者は、PTSD などのトラウマ反応、不安や抑うつ、特定の状況に対する恐怖感などの生きづらさを感じていることがわかりました。また、およそ 4 割の方が、「精神的ケアを受けることを検討したことがある」と回答しており、精神的ケアのニーズが非常に高いことがわかりました。

#### 5. おわりに

今回のアンケート調査で貴重な声を寄せてくださった皆様に、感謝を申し上げます。また、アンケートの分析に際しては、鴛田夏子様や小澤いぶき様をはじめ、多くの方々からご助言を頂きました。重ねて感謝を申し上げます。今後は、社会的養護の経験者と専門家による対話と議論の機会を設け、今回のアンケート調査の結果をもとに、政府に対する政策提言を具体化して参ります。併せて、2020 年 7 月から実施している署名活動を 2021 年 4 月まで実施し、虐待による後遺症への精神的ケアの拡充の重要性を広く訴え、一人でも多くの方々にご理解・ご賛同いただけるよう努力して参ります。今後ともご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

本件に関するお問い合わせ

**施設・里親家庭で暮らす子ども・暮らしていた若者への心のケアの拡充を求めるプロジェクト**

代表：山本昌子 info.mc4fc@gmail.com